

## 弔 辞

宮井忠夫さん

いつも元気で活力にあふれたあなたが、心臓発作のため京大病院に突然入院されたのは丁度一年前のことでありました。そしてあなたは昨日、忽然と私たちのなかから去りました。四十四歳のあなたの訃報に接して、大地のゆらぐ思いが致します。

入院以来、いつ誰が見舞っても病状や日常のあれこれを、元気な声で話され、病症の重大さを思いながらも、私たちはかえって宮井さんに励まされ、安心しておりました。「なにしろ爆弾を抱えこんでいるようなものだから」といしながら、医師の指示をいじらしいほど忠実に守り、几帳面に回復への努力を着実に重ねておられました。宮井さん、あなたも私たちと同様、健康の回復を願って信じていたにちがいません。あなたが枕元に残された小さいノートには、毎日の検査の日程、来訪者、体調が簡潔に記され、入院一年目の十一月二十日の欄には「一周年」と書きこまれて、そのノートは終り、あなたは二冊目の新しいノートをおろして、その第一ページに入院二年目の第一日を記録したばかりでした。宮井さん、あなたはあまりにも多くの余白をなお前途に残しながら、あまりにも突然逝かれてしまいました。

宮井さんは、和歌山県新宮高校から立命館大学をへて、同志社大学大学院法学研究科に学びました。昭和三十七年に同志社大学助手、同四十七年以来教授として勤められました。大学院の時代から数えて、私は二十年余り、宮井さんを友人として、研究者として、同僚として、身近に知り心に頼んでまいりました。宮井さんは研究のはじめから一

貫して家族法に興味をもち、数多くのすぐれた業績を発表されました。その論文はいずれもじっくりと時間をかけ、手をつくして集められ整理された豊かな資料にもとづいて、綿密に論証された労作であります。その業績はどれも当然に学界での高い評価をえているのであります。

宮井さんは驚くほどの読書力をもち、専門書はもちろん広く新刊書、小説を読破し、博覧強記、書かれるものにも会話のなかにも縦横に、その該博な知識、情報が生かされて、人を魅了するのです。宮井さんの遺著となった「家族法教室」は、身近な素材をもとに、家族法を学ぼうとする人への橋渡をする意図で書かれた本であります。平明な文章で書かれたこの本は、宮井さんの研究者としての学識と生き生きとした人間への興味が結びあわされた見事な結晶といえるもので、誠に宮井さんらしい本であります。これからも興味をもつ研究者、学生のあいだで長く読みつがれる名著であると信じます。宮井さんは、仕事のうえて完全主義者であり、約束を守る人でありました。さり気ない平明な表現、明快な論理を生み出すまでに、どれほど身をけずる努力がそこに注ぎ込まれていたことか。昨年の夏、かつて二年間の留学をされた西ドイツを再訪するために仕事をつめ無理を重ねたことが、宮井さんを疲れさせ体調をくずす原因になったのではないかと残念でなりません。西ドイツでは友人知己に再会し、歓待を受け、酒場で歌い、心ゆくまで曾遊の地を楽しまれたことがいまとなってはせめてもの慰めであります。

宮井さんは教室のなかでも外でも、すぐれた教師、学生から慕われる先輩でありました。同志社大学ではフォークソング・グループの顧問であり、合気道部の部長でありました。家庭裁判所の調停委員をも長年勤め、専門の知識と暖かい人柄を生かして貴重な働きをされました。同志社大学法学部では民法陣の要として、充実した講義、演習によって学生を魅きつけました。また学園紛争以来、多難な時期に長く教務主任の要職にあり、いつも細心かつゆきとど

いた配慮を忘れず、同僚から大きな信頼を受け、法学部の和を保つことに貢献されました。

宮井さん、あなたの急な死によって同志社大学法学部は実に大きなものを失いました。民法のすぐれた研究者、教師を失いました。しかし何にもまして私たちはすぐれた心暖かい友人を失いました。この空白は埋めようもなく大きなものです。あなたはみずからに厳しく他人にはやさしい人でした。あなたの学問、人間、世事万般にわたるあくことのない知的好奇心、機智にあふれる会話、あなたを中心にして広がった人間のやすらぎ、安心、健談家であるあなたを囲んで痛飲し、談論風発する楽しみ。あなたの去ったあと日とともに私たちはその空白の大きさを知ることになり、それとともに悲しみが深まることと思います。

宮井さん、あなたのことを思うたびにあなたの人間へのやさしさがよみがえります。そのやさしさは、あなたの教え子、友人、同僚、あなたを知ったすべての人の心にこれからも生きつづけることを信じます。

宮井さん、やすらかに眠って下さい。

昭和五十四年十一月二十三日

同志社大学教授・法学部長

藤 倉 皓 一 郎

(京都妙心寺衡梅院における葬儀の折に捧げられた弔辞を再録した。)